学内広報

2022.6.24 no.1559

5月24日に開所した柏FUSIONフィールド

UTokyo Diversity&Inclusion

志ある卓越。 東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

ウクライナの学生・研究者受け入れについて聞きました

D&I宣言に向けての総長対話を実施

注目！ほのぼの物理キーワード辞典

ウクライナの学生・研究者を受け入れています

2月24日に始まったロシアによるウクライナ侵攻を受け、東京大学は「学生・研究者の特別受け入れプログラム」を3月末から実施しています。4月15日には第1号となった研究者がキャンパスに到着し、研究活動を開始。総長とともにプログラムを牽引してきた担当理事、そしてウクライナから海を越えてやってきた研究者のお二人にお話をうかがいました。

ようこそ！日本へ、東大へ

担当理事に聞きました

理事・副学長

相原博昭

※1　2月の時点で、ウクライナから東大へ来て在籍している学生・研究者は4人でした（教職員が2人、学生が2人）。

※2　東京大学緊急人道支援基金には、3月30日の受付開始から6月14日までに239件約1,244万円の寄付が寄せられています。「当初、ざっと見積もって50人くらいまでなら何とか既存の枠で受け入れられそうだが100人となると厳しいと思っていました。基金でこれだけ寄付をいただけたのは本当にありがたいことです」（相原理事）

※3　受け入れ部局として決まっているのは、東京カレッジ、理学系研究科、生産技術研究所、カブリIPMU、未来ビジョン研究センター。来日済みは2人で7人が来日待ちの状態です。

侵攻直後に総長と話して即決

侵攻開始翌日の2月25日、何かしらメッセージを出そうと総長と話しました。ウクライナから来ている構成員※1をはじめ、困っている皆さんを案じていることだけでも伝えようと決め、文面を用意して同日中に全学ウェブサイトで総長メッセージとして公開しました。その後、ほかに大学としてできることがないかを総長と相談。調べると、Scholars at Riskというサイトやウクライナの研究者に手を差し伸べている例があり、これだと思いました。3月中旬には、事務の打ち合わせに総長と参加し、受け入れプログラムを立ち上げようと言いました。各部局に意向を照会したところ、多くの部局が前向きな返事をくれました。規則をしっかり定めないといけないかと心配しましたが、受け入れる際の身分の問題など、既存の仕組みで対応できると言ってくれたところが多く、非常に心強かったです。

その後、具体的な支援内容を検討し、渡日までの支援、住居支援、経済的支援、生活支援の4本柱を設定しました。経済的支援は外国人留学生向けの支援制度を参考に月8万円とし、苦労して避難してきた人が対象なので学費等は不徴収としました。宿舎の提供については施設部と相談して目白台インターナショナルビレッジを基本とすることに。この辺りは学内の声を集めて決めるのではなくトップの判断でした。時間がかかると手遅れになるかもという危機感と、大学は社会に貢献すると言いながらこういうときに何もしないのはよくないという思いが強くありました。3月18日に部局向けのオンライン説明会を行ない、3月30日にプレスリリースを出しました。渉外本部と相談して支援のための基金を同時に立ち上げ、同日にリリースしました※2。

「前例がないからやらない」は×

これまでにも各地で困難に直面する人はいましたが、全学的な支援活動はありませんでした。なのになぜ今回は支援するのかという指摘も聞きます。ですが、前例がないから今回も見ているだけでいいかといえばそれは違う、というのが総長の思いでした。今回はウクライナで苦しむ人を支援する。その後ほかのケースで苦しむ人に目を向けることは当然ありえます。プログラムや基金の名前にウクライナと入れなかったのはそのためです。

5月24日時点では、申請件数は200件超で、9人の受け入れが決定済み※3。本部に届いた申請書類は、学生は国際支援課、研究者は人事企画課が確認しています。1年間のプログラムですが、受け入れがもともと難しい学部生の申請が多かったり正規課程への編入を希望されたりと現地からさまざまな希望が寄せられます。闇雲に受け入れてもよくないので、可否の判断とマッチングに時間がかかっています。申請件数に比して決定人数が少ないのはそのため。大学の資金や宿舎を使う以上アカウンタビリティも重要で、こういう理由でこの人を支援したということを担保する必要があります。

本部と受け入れ部局の両方で仕事が増えているのは確かです。しかし、その仕事は大学の社会貢献に直結しています。大変だと思いますが、教職員の皆さんには、東大の重要なミッションを担っているのだと思っていただけるよう、担当理事としてあらためてお願い申し上げます。

受け入れ第1号の研究者に聞きました

東京カレッジ訪問研究員

イリーナ・ペトリチェンコ

※1　母校における学習者数は日本語が200人程度で中国語は800人程度。背景には、2013年から大学内にオフィスを置き、語学学習も文化イベントも留学も全部カバーする中国の「孔子学院」の存在が大きいそう。

※2　現在の駒場インターナショナルロッジです。

※3　1956年から続く音楽の国別対抗コンテスト「ユーロビジョン」で、今回ウクライナのバンドKalush Orkestraが史上最高となる得点で優勝したことなど。

※4　4月15日、東京カレッジがある第二本部棟の前で羽田先生と握手。

「Дякую」（ジャークユ）はウクライナ語で「ありがとう」の意

留学生時代に東大とのご縁が

――キーウ国立言語大学東洋語学部の日本語主専攻を卒業されたそうですね。母校では日本語の人気はどうだったのでしょうか。

「以前は中国語と人気を二分していましたが、約10年前から中国語に差をつけられ、いまは韓国語と2位を競っています※1。東洋語学部は1995年の発足当時は小組織でしたが、いまは大学の最大学部です。外大を選ぶ人は新しい言語に挑戦したくなるもので、東洋語を選ぶ人も多いです。主専攻が東洋語で副専攻が西洋語の場合が多く、私もそうでした」

――日本に興味を持ったきっかけは？

「子供用の歌を習ったりひらがなとカタカナを覚えたりという程度ですが、高校時代にクラブ活動でかじりました。私の高校には人と違うことをやろうという校風があり、東洋語が当時珍しかったのでやっていました。動詞の活用表が五十音図に対応するのに感動し、自分なりの規則を考えたりしました」

――日本には2回留学されていますね。

「2回とも日本政府の国費留学生でした。1998年から1年間、名古屋大学で日本語・日本文化研修生として過ごし、2005年から4年間は東京外国語大学の大学院生です。当時は東京外大の寮が未整備で、駒場IIキャンパス近くの日本学生支援機構の駒場国際交流会館※2で最初の2年を過ごしました。その後、駒場IIキャンパス正門横にある部屋を借りました。だから東大生協はよく利用しましたし、窓から見える駐車場でモビリティ研究者が実験するのを眺めた記憶もあります」

――東大のプログラムはいつ知りましたか。

「日本人の友人が30日の記者会見を見て教えてくれました。以前は名古屋大の先生で、いまは東大生のお孫さんがいる方です。すでに来日済みで、今後どうしようかと考えていた時期でした。すぐに検索して詳細を調べ、31日に問い合わせメールを送りました」

――キャンパスの印象はいかがですか。

「とにかく広いです。地元の人が犬の散歩をしていたり三四郎池の近くで鳥が鳴いていたり。市民だけでなく人間だけでもなく動物にも開かれたキャンパスという感じがします」

日本の新聞の全面広告を分析

――日本で進めたい研究をご紹介ください。

「日本の新聞全面広告を対象にした研究です。広告特集以外の全面広告を選び、登場する時間副詞句（全2713句）を抽出して分析します。対象のデータは来日前に1141句を入力済みでした。残りを入力し、句の登場頻度、使用コンテキストの傾向、特定の広告主や業界で時間副詞が何か特徴を持つのか否かをまとめる予定です。デジタル広告は表示の仕様がプラットフォームに依存しますが、新聞全面広告は周囲からの独立性が強く、文章ぎっしりにするのも写真ばかりにするのも自由。広告主の個性が出やすいのが特徴です」

――学内研究者との交流も始まったとか。

「東京カレッジ長の羽田正先生の紹介で文学部言語学研究室の小林正人先生にいろいろご教示をいただき、先日はスラヴ語スラヴ文学研究室の楯岡求美先生の授業「ウクライナの多様な文化を学ぼう」に講師として参加しました。ウクライナの音楽事情※3や日本語教育の現況を紹介しました。医学系研究科国際地域保健学教室からは調査の打診を受けました。避難民の生活に必要なことを学んで支援につなげたいとのことでした。私は初登学時※4に「温かい真心に感謝します」と話しましたが、その思いはいまも同じです。東大の皆さんが私を助けようとしてくれていると感じます。私も何かできることがあれば協力したいと思っています」

全50のプログラムで申請を受付中

ウクライナ侵攻を受けた東京大学の「学生・研究者の特別受入れプログラム」では、学生向けに21、研究者向けに29のプログラムが用意されています（5月30日現在）。速やかに大学として提供できる教育・研究環境を公開し、希望者に情報が届くようお知らせするとともに、経済的支援（渡航費用や生活支援金の支給など）、住居支援、生活支援をあわせて行うものです。学生には基本的に教員による研究指導等を行い（学位取得を目的としない非正規生としての受入れ）、研究者には研究活動が継続できるよう支援を行います（無給の研究ポジションでの受け入れ）。

誰でも身近なところで手軽に応援できます

東京大学緊急人道支援基金
https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt144

キャッシュレス決済アプリのJ-Coin Payを使って少額から寄付ができる「ぽちっと募金」、読み終えた本や使わなくなったモノをブックオフに送ることで売却代金全額を支援に役立てる「リユース募金」、メルカリに出品して得た売上金を寄付にまわす「メルカリ寄付」も利用できます。

D&I宣言発出に向けての総長対話を実施

UTokyo Compassで具体的な行動計画として挙げられたダイバーシティ＆インクルージョン（D&I）宣言の発出に向け、その策定プロセスへの構成員の参画を目的とした総長と教職員・学生の対話がオンラインで開催されました。5月17日（教職員対象）と19日（学生対象）の2日間に展開された意見交換の内容の一部をダイジェストして紹介します。

藤井輝夫総長、林香里理事・副学長、D&I宣言WG座長の高野明教授が登壇し、武田洋幸執行役・副学長が司会を務めました

教職員との意見交換より

社会的障壁を明確に示しては？

教員1　今回の宣言案ではEquityの面も考慮されているのがうれしいです。社会には教育でも雇用でも娯楽でも様々な障壁があります。そうした社会的障壁を明確に記すとなおよいと思います。また、D&Iカルチャーセンターのような場を設ければ、資源の一元化の意味でも役立つと思います。

藤井　社会的障壁を明確にすることは、宣言の理解を深めるために重要だと思います。教養学部と教育学部にあるセイファースペースのように、多様な方々が集まって対話ができるような場所を作り、D&I精神の共有を一層進められればと思います。

信頼できる救済機関の整備が必要

教員2　D&I宣言はもちろん素晴らしい一歩ですが、より重要なのは、この宣言が組織の意思決定に対して効力を持つことです。そして、宣言の内容が守られなかった際の救済措置がないといけません。たとえば異議申し立てをするための、信頼しうる救済機関が準備されないといけないと思います。

藤井　相談支援研究開発センター機能の強化を検討しています。D&I宣言に記したことの進捗状況をモニターしてレポートすることも必要かと考えています。

林　モニタリングは全学として進めますが、取り組みの実践の舞台は部局。ぜひ本部とグッドプラクティスを共有してください。

D&Iと学術の重要な関係に言及を

教員3　宣言案のなかに、多様なメンバーとの対話の継続が学術の卓越性にとって重要であることの記載がないのを懸念しています。D&Iは学術的卓越性を目指す大学にとって不可欠であることを、一文だけでもいいので追加して欲しいと思っています。

教員4　WGでその点を話した際には、卓越した学術的成果を出すためだけにD&Iを推進するように受け取られかねない書き方は避けよう、という議論がありました。

藤井　それが唯一の目的だと思われてしまうのはよくないですが、一方で大学が誰もが安心して議論や学問ができる場を目指しており、その結果として卓越したものが出てくると考えていることは述べてよいと思います。

マジョリティ層へのD&I教育を

職員1　マジョリティに属する構成員はD&Iが自分ごとになっていません。こういう場に顔を出さないそうした人たちにこそD&I教育の機会を提供してほしいです。

藤井　前期課程の学生向けに用意した啓発動画などで、教職員の皆さんも学べる仕組みを考えたいと思っています。

林　ワーク・ライフ・バランスがカギになると思います。男性も女性も育児休暇や介護休暇を取りやすくなる仕組みを考えています。

D&Iに関する文章を提出させては？

教員5　アメリカの大学では研究職に応募する際にD&Iに関するステートメントが求められるようになっています。新規採用に限らず、すでにいる構成員に対しても同様のものを提出させています。東大でも取り入れてはどうでしょうか。参考になる事例をご紹介することも可能です。

藤井　採用に関わることは慎重な検討が必要ですが、一度勉強してみたいと思います。

学生との意見交換より

LGBTQに関する部分が手薄では？

学生1　UTokyo CompassにLGBTQという言葉は登場しません。大学サイトのD&Iページには、バリアフリーと男女共同参画の情報はあれど、LGBTQが専門の組織や専門家の情報はありません。D&Iキャンペーンが6月で終わった後の扱いも心配です。

林　ご指摘は真摯に受け止めたいと思います。UTokyo Compassではダイバーシティ研究・教育推進機構（仮称）の設置について記しました。そこで性の多様性についてもカバーしていきたいと思っています。

高野　相談支援研究開発センターでも性の多様性の専門家はいないのが現状で、そこは課題と捉えています。キャンペーンについては、あくまで始まりのきっかけであって決して終わりではないと思ってください。

構成員への宗教上の配慮も必要

学生2　私は仏教徒ですが、キャンパスには修行をするのによい場がありません。ムスリムにも祈りのスペースが必要です。宗教上の必要に配慮した取り組みをお願いしたいと思います。

藤井　食では生協食堂にハラール食が導入されていますが、ほかはまだまだです。改善策を考えていきたいと思います。

林　学生が快適に過ごせる場所を整備拡充するニーズはありますね。総長、どうかよろしくお願いいたします。

学内に残る男性中心社会の弊害

学生3　学内のオールド・ボーイズ・ネットワークに日々辟易しています。周囲が感じている疎外感をどう伝えたらよいのでしょうか……。

藤井　ある程度トップダウンで動かすことも大事でしょう。たとえば、産業界の意思決定層の女性割合を30%以上にしていこうという趣旨で活動している30% Clubでも、東大として積極的に発信していきたいと思います。

難解な用語を声優の梶裕貴さん＆水中生物がふんわり解説！

ほのぼの物理キーワード辞典の担当者に聞いてみた

アクティブマターを説明するイイダコ先生

超ひも理論やスピントロニクスやトポロジカル物質といった13の物理用語を、ショウジンガニやボウズハゼやドジョウといった水中生物（に扮した梶裕貴さん）がわかりやすく解説するという前代未聞の動画コンテンツ、もう見ましたか？ 企画を担当した2人のURAにその中身や工夫点などについて教えてもらいました。

理学系研究科YouTube→
www.youtube.com/UTokyoScience

13のキーワードと監修者・協力者→「**超ひも理論**」「**量子重力**」（濱口幸一、松尾泰、大森寛太郎）、「**スピントロニクス**」（林将光、齊藤英治@東大工）、「**トポロジカル物質**」（中辻知）、「**アクティブマター**」（竹内一将、西口大貴、芳賀永@北大）、「**メタマテリアル**」（小西邦昭、田中拓男@理研、Federico Capasso@ハーバード、田中浩也@慶応）、「**テラヘルツ光**」（島野亮、川瀬晃道@名大、阪本成一@国立天文台）、「**超伝導**」（常行真司）、「**量子コンピューター**」（村尾美緒）、「**ニュートリノ**」（横山将志）、「**ダークエネルギー**」（横山順一）、「**宇宙マイクロ波背景放射**」（日下暁人）、「**モーターたんぱく質**」（樋口秀男、茅元司、岡田康志）

コロナ禍ゆえに生まれた好企画

――企画はどのように生まれたんですか。

「物理の世界には素粒子から宇宙まで様々なスケールの研究があります。量子論を軸に各スケール間の相乗効果で新しい学術を打ち出そうと2020年2月に発足したのがトランススケール量子科学国際連携研究機構です。コロナ禍で自粛生活が続くなか、機構を宣伝する方策として、CURIE※との連携でレクチャー動画を制作しようという話になりました。主に学部生を対象とした約10分×3本の動画が大反響を呼び、次は中高生が物理の世界に興味を持てそうなものにしたくて、約2分間の短い動画で難解な用語と癒しの掛け算となる企画を検討し始めたのが、去年6月頃です。物理学専攻では卓越した研究が進んでいますが、一般の中高生にはそれが伝わっておらず、何とかしたいという気持ちが強くありました」

――物理×魚の意外さにグッときました。

「制作をお願いしたNHKエンタープライズに水中生物のアーカイブがあるのでそれを「癒し」につなげたんです。若者にはアニメ声優が人気だと制作陣から提案があり、梶さんに相談してもらったところ、企画を面白がってすぐOKをくれました。キーワード候補を選び、JSR社とも相談して13個に絞ったんですが、あの梶さんが13の声を使い分けると思うとワクワクしましたね。物理をきちんと理解するのは2分では無理なので、こんな現象があることだけでも伝われば十分と腹を括りました」

――精確さとわかりやすさとの間で葛藤があったのでは？

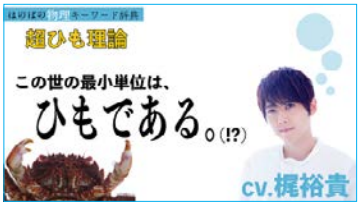
「知らない人にどうすれば伝わるかを制作陣がしっかり考えてくれました。11月にキーワード別監修者・協力者24人を決め、約1ヶ月で原稿を確認してもらいました。提案されたネタのなかで面白さが伝わりやすいものを厳選し、また「これはまだ説にすぎないから断定しないほうがいい」といった指摘を受けた際にも、ニュアンスの違いも反映しつつ中高生がわかるレベルに着地させてくれたと思います」

実はカニやシャコにも意味が!?

「生物の選定に深い意味はないですが、光を操るメタマテリアルでは目がきらきらしたシャコ、超ひも理論では毛が生えたカニなど、少しずつ話と連動していたりもします。梶さんの収録は2月にスタジオで半日かけて行いました。アクティブマターから始めましたが、最初の数回は様子見だったのかおとなしめ。超伝導あたりからアドリブも増え、トポロジカル物質では外国人風の強烈なイントネーションになっていてお薦めです。終盤、イケメンボイスがないと気づき、最後に収録した超ひも理論の回は梶さんらしさ満載のイケボになったので、公開時はこれを一発目にもってきました。動画編集と監修者の再確認を経て、3月20日に納品。4月18日に公開しました」

――納品から少し日を置いたんですね。

「新学期に慣れて友達ができた頃に公開したほうが口コミを期待できると思いました。幸い80万ものフォロワーがいる梶さんがTwitterで発信してくれて、多くのファンの皆さんが見てくれました。一発目の超ひも理論は1日で2000回再生。若い人はもちろん、保護者世代が子に見せるとつぶやくケースもあり、手応えを感じました。全13回あるので、ビデオを上映しながら各回の監修者が講演するオムニバス講義シリーズなんかも考えてみたいですね。最後に、このような企画に賛同し協力してくれた先生方、サポートしてくれたJSRにはこの場を借りて感謝したいと思います」



動画の広報用バナー画像

※素材メーカーJSRと東大との協創オフィス。

海と希望の学校 in 三陸

第20回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センターを舞台に、社会科学研究所とタッグを組んで行う地域連携プロジェクト――海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み――です。5年目を迎え、活動はさらに展開していきます。

海ごみと希望の学校 in 三陸 ～環境モニタリングを通じて地域を知る～

大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センター
地域連携研究部門准教授
福田秀樹

今回は当センターが「NPO法人環境パートナシップいわて」と「いわて海洋コンソーシアム」とともに行ったWebイベント「森と海をつなぐプロジェクト企画」について紹介したいと思います。このイベントは三陸海岸に流れ着く海ごみをはじめ、岩手県沿岸部で起きている環境問題を紹介するために企画されましたが、このイベントのなかで当センターの早川淳助教と大槌高校・はま研究会（詳しくは第10回記事（no.1539 / 2020.10.26）をご覧ください）の海ごみ研究班が大槌町内で継続している海岸への漂着ごみの調査結果を高校生たちが紹介してくれました。

吉里吉里海岸での漂着物の採取

✦ ✦ ✦ ✦

イベントは漂流物学会会長である大気海洋研究所の道田豊教授による「漂着ごみはどこから来てどこにいくのか」と題した講演で我が国をとりまく海流とごみを含む漂着物の特徴を概観するところからはじまり、早川助教による大槌湾での海ごみ調査の趣旨と取り組みの紹介のあと、海ごみ研究班の高校生2名による調査結果の報告がありました。つづく大槌町町議会議員で岩手県地球温暖化防止活動推進員の臼澤良一議員による「大槌町のごみ減量化やリサイクル・自然保護の取り組みについて」（代理講演　櫻井則彰推進員）と題した講演では、大槌町での海岸清掃イベントやごみ減量に向けた大槌町の施策の紹介があり、参加者は海ごみを取り巻く現状と、人々の取り組みについて情報交換をすることができました。

海ごみ研究班によるオンラインイベントでの講演は、緊張は見られたものの、今回で2回目ということもあり、練習の成果がいかんなく発揮された発表でした。道田教授からも「既に学会で発表できるレベル」とのコメントがありましたが、他の参加者からも学会発表かのような質問がつぎつぎに出され、2人とも自分の言葉で考えを述べていました。講演に対する質疑応答も終わり、ほっとしたようすの2人でしたが、調査から発表までの一連の活動に対する感想も聞いてみました。炎天下や身を切るような寒風が吹きすさぶなかの採取と、実験室での地道な分別といった作業の大変さだけでなく、「自分の地域のことが分かる」と述べていたことが印象的でした。今回は他地域との調査結果の比較が可能な調査方法を採用したこともあり、この町の海ごみがもつ特性を考えることができたほか、その特性に関連するこの地域の海洋学的特性について紹介することが多々ありました。それらが彼らのこころに残っていてくれていたようです。この地域連携プロジェクトが彼らへの教育支援だけでなく、プロジェクトの特色でもあるローカルアイデンティティの再構築にも貢献していると感じられた出来事でした。今後も様々な工夫を凝らして、我々の研究成果を地域振興に役立てていきたいと思います。

実験室での漂着物の分別

Webイベントでの成果発表

「海と希望の学校 in 三陸」公式 Twitter（@umitokibo）

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）

デジタル万華鏡 第29回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

駒場図書館 情報管理チーム専門員 三浦圭子

「一高旧蔵資料」サイトの公開

2022年2月9日、「第一高等学校旧蔵資料」のサイトをオープンし、東京大学学術資産等アーカイブズポータルで利用できるようになりました。

第一高等学校旧蔵資料（一高資料）は、現在、主に駒場図書館・駒場博物館に所蔵されている、旧制第一高等学校（一高）旧蔵の文書・図書・掛図・機器・写真などからなる資料群と、一高の関係者（教官・卒業生など）によって作成・収集・寄贈された資料群から構成されています。

今回公開したのは、駒場図書館所蔵の「朝庭御鷹野之影」、「本朝世紀」、「教育用掛図」、駒場博物館所蔵の「スタニスラス・プチ『産業実務家』」の4コレクションです。

朝庭御鷹野之影（部分）

実は、一高資料のデジタル画像は2008年～2009年に最初のサイトが情報基盤センターのサーバに構築され、「教育用掛図」と「スタニスラス・プチ『産業実務家』」の2コレクションが公開されていました。デジタル技術の向上、公開・利用ポリシーなどデジタル画像の取扱いの変化に対応するため、「スタニスラス・プチ『産業実務家』」は2020年に学術資産等アーカイブズ共用サーバに移して一足先にリニューアルし、IIIF*を用いた画像公開を開始していました。

プチ：PL.89 MÉCANIQUE No.64

今回、「教育用掛図」も同様にリニューアル公開するとともに、駒場図書館所蔵の「朝庭御鷹野之影」、「本朝世紀」を新規にデジタル化公開するのを契機に「スタニスラス・プチ『産業実務家』」も合わせて「第一高等学校旧蔵資料」サイトに統合・公開することになりました。一高資料全体から見ると、ほんの4コレクションだけの公開ですが、今後さらにデジタル化を進め、コレクション内容を充実させていければと思います。

https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ichiko/page/home

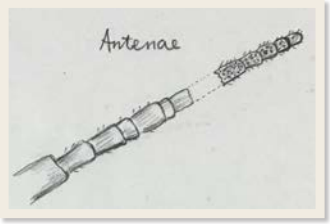
※International Image Interoperability Framework

蔵出し！文書館（ぶんしょかん） The University of Tokyo Archives 第38回

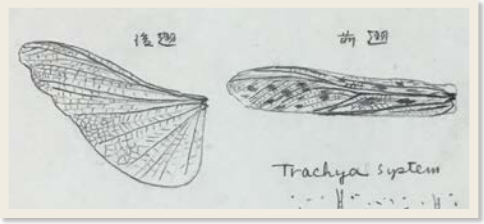
収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介

スケッチからたどる学びの過程

今回ご紹介するのは、東京帝国大学で農学を学び、卒業後は農業教育に携わった谷口義治という人物の資料です。当館所蔵の谷口の資料群（F0116）には、農学部在学時のノート類を中心に、旧制第五高等学校に通っていた時代の資料も含まれており、その中に実験に使ったバッタと蛙を描いたスケッチ（F0116/S1/094）があります。生物スケッチは対象の生物の身体構造を理解する為にもよく観察し丁寧に正確に描く事が求められますが、画像のバッタの触角の節一つ一つが描かれているのや翅脈の細かな描写からは谷口も正確に丁寧に描く事に重点を置いてスケッチをしていた事が窺えないでしょうか。



バッタの触角のスケッチ



バッタの前翅と後翅のスケッチ

谷口の旧制第五高等学校時代の資料は他にも英作文や動物学、数学のノート類が残っており、特に動物学は農学と関わりが深い分野です。こうした高等学校での学びを示す資料からは、谷口が大学で農学部に進学するまでの一過程が窺えます。加えて、高等学校時代の若い頃のノート類を捨てずに持っていた点からは、谷口が高等学校から大学に至るまでの学生時代の学び全般を重要なものと見ていたのかもしれないことがわかります。今回ご紹介の資料は、谷口義治という人物が一学生から農学教育者となるまでに経た学びの過程を垣間見る資料とも言えるでしょう。

今回ご紹介したスケッチのような絵図資料は「見る」だけでも楽しむことが出来ますが、このように資料の持つ特徴や作成される過程に目を向けてみたり、「何故残っているのか」という事を考えてみると、より深く楽しめます。文書館で資料を閲覧される際には是非様々な視点からお楽しみください。

（学術専門職員・井上いぶき）

東京大学文書館

ワタシのオシゴト 第193回

RELAY COLUMN

本部広報課特任専門員 高井次郎

青赤だった心が気づけば淡青色に

広報課がある安田講堂１階の通用口前にて

『淡青』『学内広報』の編集を2013年から担当しています。16年に及ぶフリーライター生活の終盤、ギャラ不払い裁判等で疲弊していた頃に東大に拾ってもらいました。冷淡、傲慢、尊大といった世にまだ残る印象を廃してサポーターを一人でも増やそうと思いながら働いています。取材時あどけなかった学生さんが後に大人の顔になっているのを見たり、駒場祭で似顔絵を描いてくれた1年生が3年後の五月祭でお洒落な店を出しているのに遭遇したり、見本誌送付状に描いた絵に反応してくれる人がいたりすると、やってよかったなとしみじみしますが、寄る年波には勝てません。

趣味は昼休みのサークル活動に誘ってもらったのを機に始めたウクレレ。だけど譜面がないと何もできません。サッカーを観るのもやるのも好きでしたが、農学部グラウンドで自分のシュートの跳ね返りが直撃して網膜剥離を患って以来、怖くてやらなくなりました。その手術をしてもらったのも東大病院。ふと気づけば人生の大半がライトブルーに染まっていましたとさ。

青赤Ｊリーグクラブの応援とウクレレの掛け算

得意ワザ：長すぎる原稿を圧縮すること
自分の性格：陰鬱
次回執筆者のご指名：紫村次宏さん
次回執筆者との関係：ウクレレの師匠
次回執筆者の紹介：何でも弾けて歌えて踊れる全能者

ぶらり構内ショップの旅 第4回

U-gohan @本郷キャンパス の巻

北海道の無農薬のコメと野菜

2020年2月、本郷キャンパスの工学部11号館2階にオープンしたお店、「北海道の米と汁 U-gohan 東大正門」。隈研吾先生が設計したHASEKO-KUMA HALLのラウンジの一角で、北海道で育てたお米と野菜を使ったお弁当を販売しています。運営するのは、北海道当別町の社会福祉法人「ゆうゆう」。店名の「U」は法人名の「ゆう」と英語の「you」を掛けているそうで、温かいご飯と人のつながりを紡いでいけるように、との思いを込めています。

店長の髙島さくらさん

「徐々にお客さんが増え、常連さんと会話することも多くなりました。これまであまり触れ合う機会がなかった、学生さんと会話できるのも新鮮です」と店長の髙島さくらさん。とはいえ、まだキャンパスでの知名度は低いと感じているそうで、ぜひ一度足を運んでみてほしいと言います。

コロナ禍による2回の休業を経て、現在はお昼にお弁当４～５種類とスープを販売しています。一番人気はボリュームがある北海道のからあげ「ザンギ」を使ったお弁当（900円）。当別町で作っているコロッケを使ったお弁当（850円）も根強い人気があるとか。女性に好評なのは、ヘルシーな豚しゃぶ弁当（950円）で、豚しゃぶの上にゆで野菜と北海道産玉ねぎを使ったソースがたっぷりかかっています。お弁当に使われているお米と、かぼちゃやじゃがいもなどの野菜は、当別町の農園で農薬を使わずに育てています。東京ドームの約２倍の広さがある田んぼで栽培している「ななつぼし」は、甘みがあり、冷めてもおいしくお弁当にピッタリだそうです。

ゆうゆう本社で就労支援を担当する山下あゆみさんは、美味しいお弁当を提供するだけでなく、お客さんとのコミュニケーションも大事にしていきたいと話します。「お店でスタッフとちょっと話すことで、ホッとしたり、居心地の良さを感じてもらえると嬉しいなと思います」

一番人気のザンギ弁当

営業時間●
11:30~14:30
お問い合わせ：
03-5615-9458

https://www.u-gohan.jp/

インタープリターズ・バイブル 第178回

情報学環 教授
科学技術インタープリター養成部門
大島まり

データ化できない評価指標

専門のバイオメカニクスの研究の傍ら、研究成果を初等中等教育に活かそうと科学技術・STEAM教育に長年にわたり取り組んでいる。そのためか、最近、大学教員・研究者向けに探究活動について話す機会が増えている。今年度から、新学習指導要領の高等学校課程への本格導入に伴い、「総合的な探究の時間」や「理数探究・基礎」の授業がはじまり、研究者が高校での探究学習に関わる機会が増えているからだろう。

先日も、某大学から私が所属している生産技術研究所の次世代育成オフィスの取り組みについての講演依頼を受けた。オンラインでの発表後、質疑応答の時間となった。真っ先に受けた質問は、「このような活動は、教員評価にどのようなメリットがあるのでしょうか」。同様な質問はほぼ毎回、受ける。教員の科学技術コミュニケーション能力の向上に役立つ、等々、アンケート結果に基づいて答えた。しかし、参加者があまり納得していないことが画面越しからも感じる。とほほ。。。もっと客観データで有効性を示すことができたらと、アンケート調査の方法を工夫したりと試行錯誤しているが、明確な回答がなかなかできない。

そうしたら、先日、同じような悩みを抱えている人に出会った。弁護士のカタリーナである。厳密に言えば、物理的に出会ったのではなく、「スーツ」というドラマの中である。ちなみに、「スーツ」は英国王室メーガン妃の出世作である。日本版スーツも制作された。

カタリーナは、所属しているAssociateのリストラをかってでる。パティという業績評価のプログラムを使って10名を選ぶ。しかし、そのリストの中には上司が高く評価しているブライアンの名前が。上司は評価指標を変えてでも、彼を残すように命令する。優秀で良い人なのだが。指標を色々と変えて評価し直すが、彼の良さを示すことができない。ところが、あることから彼が優秀なTOP5全員のAssociateをサポートしていることがわかり、勤務時間などの客観（Objective）データだけでなく、形のない（Intangible）な要素も考慮する必要があることに気づく。

研究者が初等中等教育に関わることの有効性や意義の高さなどは理解できるのだが、というのが大方の意見である。しかし、より多くの研究者がSTEAM教育に参画するためには、概念的な感覚だけではなく、評価にプラスになることを具体的に示すことは大事である。番組の中では、カタリーナがIntangibleな要素をどのような形で評価に入れたのかは語られていない。私達の試行錯誤は続く。

科学技術インタープリター養成プログラム

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第32回

渉外部門
シニア・ディレクター
高橋麻子

周年のチャンスを生かせ！

大学にとって設立○周年は特別な年です。多くの大学では記念式典やシンポジウム、施設建設等の周年事業が企画され、その運営資金として卒業生や関連団体と連携した大規模なファンドレイジングが展開されます。

米国ハーバード大学は2012年に創立375周年を迎え、2013年から4年10か月の寄付キャンペーンをおこない、目標金額65億ドルを大きく上回る96億ドルを集めました。カリフォルニア大学LA校（UCLA）では、2019年の100周年に向けて未来への永続的な貢献ができるエンダウメント（大学基金）への共感を集めて7年7か月で寄付55億ドルを達成しました。

米国大学では数年～10数年に渡るキャンペーンが当たり前ですが、ファンドレイジングの成功の裏には、専属部署を強化するほかに、学長や学部長など経営層がリーダーシップを発揮する、学内外のボランティアが多数参加する、アルムナイコミュニティが活性化している、魅力的な謝意・特典がある、学生・教職員・卒業生の大学全体でお祭りムードを盛り上げるなど、いくつかの共通点があります。

日本でも早稲田大学が2032年の150周年に向けた20年数値目標（Waseda Vison 150）を掲げ、校友会との連携や広報活動を強化し、寄付目標金額100億円のうち2020年には50%を達成しています。東京大学では140周年事業として中央食堂リニューアルや山上会館リノベーションに多数のご寄付をいただきました。

周年をきっかけに、あらためて卒業生や地域住民に大学のビジョンや取組みを知ってもらい、研究活動や学生への支援を通じて大学との繋がりや対話が生まれていきます。寄付金額に注目しがちですが、大学を取り巻く様々なステークホルダーとの絆が深まることこそが周年キャンペーンの真の成果なのだと思います。

東京大学の大きな節目となる150周年まであと4年9か月。チャレンジが始まります！

大学の周年キャンペーン事例

	ハーバード	UCLA	UCバークレー	早稲田
期間	2013.9~ 2018.7	2014.5~ 2019.12	2020.2~ 2023.12	2011.12~ 2023
年月	4年9か月	7年7か月	9年9か月	21年
寄付金 （達成率）	96億ドル （147%）	55億ドル （130%）	54億ドル （90%） 2022.1時点	49.8億円 （50%） 2020時点

東京大学基金事務局（本部渉外課）
kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

トピックス

全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles）に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
5月16日	本部学生支援課	硬式野球部 3 名が窃盗犯逮捕に貢献し、警察署より感謝状授与！
5月17日～6月7日	広報室	寮日誌が喚起した映像と言葉で迫る一高生のアイデンティティ／小手川将さん、研究者が薦める映画 .1『ムクウェゲ』／紛争鉱物研究者・華井和代、研究者が薦める映画 .2『日本沈没』／地球物理学者・木下正高、研究者が薦める映画 .3『デニス・ホー ビカミング・ザ・ソング』／阿古智子｜『淡青』44 号より
5月24日	情報理工学系研究科	メタバース上でサークル新歓オリエンテーションを実施
5月25日	本部学生支援課	東京大学洋弓部が男子 2 部リーグで完全優勝！＆ 1 部リーグ昇格！
5月27日	本部広報課	【ガイド募集】「東京大学キャンパスツアー」2022 年度採用について
5月30日	本部保全課	「赤門オンライン見学会　第 2 回」YouTube/ 東大 TV 公開のお知らせ
6月6日	カブリ数物連携宇宙研究機構	Kavli IPMU 15 周年記念シンポジウムを開催
6月8日	広報室	「厳しい助言」を糧にし、働き方改革を目指す｜ Entrepreneurs 14
6月8日	本部国際戦略課	日・フィンランド Beyond 5G/6G 共同セミナーを開催
6月13日	工学系研究科・工学部	第3回 東京大学ー清華大学 オンライン学生交流イベントを開催

CLOSE UP　日・フィンランドBeyond 5G/6G 共同セミナーを開催　（本部国際戦略課）

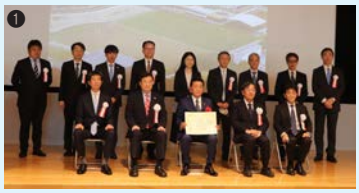
上／講演で両国連携によるBeyond 5Gの推進に意欲を示したマリン首相。下／パネリストには現在理化学研究所理事長を務める五神真前総長の姿も

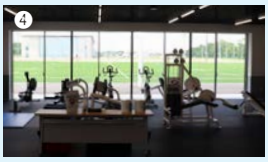
5月11日、日・フィンランドBeyond 5G/6G共同セミナー「デジタル化の社会的インパクト～Beyond 5Gの推進に向けて～」が、安田講堂にて開催されました（総務省と在京フィンランド大使館が共催し東京大学が後援）。両国間の連携を強化し、Beyond 5G/6Gの推進に向けた国際連携の取組を加速することを目的に開催されたセミナーでは、総長による開会挨拶、サンナ・マリン首相および竹内芳明総務省審議官による基調講演のほか、Beyond 5G/6G分野での両国の連携をテーマとしたパネルディスカッションなどが行われました。オンライン配信には約400名、対面参加には約200名から参加登録がありました。

パネルディスカッションの冒頭では、染谷隆夫工学系研究科長が、工学系研究科の技術による社会課題解決の取り組み、人や分野を繋ぎ知恵を結集する次世代サイバーインフラの重要性に触れました。次に、中尾彰宏教授が、Beyond 5Gにおけるフィンランドと日本の共同の取り組みの状況、特に、Beyond 5G推進コンソーシアムと6G Flagshipプロジェクトとの MoUの締結、マッティ・ラトヴァ・アホ教授へのGlobal Fellowの称号付与、次世代サイバーインフラ連携研究機構の活動など、連携の基盤が構築されていることを紹介しました。その後の議論では、日本とフィンランドが情報通信をはじめとした最先端の技術連携を進めるための連携分野と、その具体的な最初の一歩は何かを見定めるため、パネリストがそれぞれ大学、企業、国立学術機関の立場から意見を交換しました。

表紙について／柏FUSIONフィールドがオープンしました

5月24日、柏FUSIONフィールドの開所式・施設見学会が開催されました。柏図書館メディアホールで行われた開所式では、スポーツ先端科学連携研究機構（UTSSI）の中澤公孝機構長と中村仁彦工学系研究科上席研究員が、本郷・駒場・柏のFUSIONフィールド構想、そして株式会社丸和運輸機関（以下、丸和）との共同研究について紹介。各種センサーを備えたフィールドで選手の運動データをリアルタイムで取得し分析する試みが始まったことを伝えました。大久保達也理事・副学長による挨拶の後、柏共同学経委員長の中畑雅行宇宙線研究所長が丸和代表取締役社長の和佐見勝様へ感謝状を贈呈。和佐見様からご挨拶をいただき、最後に関係者一同で記念撮影を行いました。その後、一同は柏キャンパス北東部にあるフィールドに移動し、クラブハウスやトレーニング機器、UTSSIの研究者たちの拠点となる研究室、人工芝が整備されたラグビー場などを見学しました。健康・スポーツ科学研究の拠点として、また本学構成員の福利厚生施設としても利用される柏FUSIONフィールド。今秋には天然芝のラグビー場も整備される予定です。





❶開所式の記念写真。前列中央が丸和の和佐見社長。❷フィールド内 6 ヶ所に配置されたポールに 40 台からなるカメラシステムが取り付けられます。❸❹クラブハウスの外観と 1 階のトレーニングルーム。

CLOSE UP　窃盗犯逮捕に貢献した硬式野球部３名に感謝状が（本部学生支援課）

感謝状を授与された3選手

運動会硬式野球部の投手3名（青木麟太郎さん、小髙峯頌大さん、松島司樹さん）が、4月23日の練習時に弥生キャンパスにある東大球場の観客席から財布が入った荷物を持ち去ろうとした者を取り押さえ捕まえました。その者は大学施設を狙う窃盗の常習者とみられ、3名の勇気ある行動により逮捕されました。このたび窃盗犯逮捕に貢献したことから、5月13日に警視庁本富士署より、学生3名に対し感謝状が贈られました。本富士署長より、常習の窃盗犯逮捕ということもあり今後起こるかもしれなかった犯罪を防ぐこととなり、今回の3名の勇気のある行動に大変感謝したいと述べられました。

CLOSE UP　洋弓部が男子2 部リーグで完全優勝し1 部に昇格！（本部学生支援課）

洋弓部の皆さん。おめでとう！

4月16日～24日に夢の島公園アーチェリー場にて、関東学生アーチェリー男女リーグ戦が開催されました。そのリーグ戦において、東京大学洋弓部は男子2部リーグにおいて完全優勝を果たし、見事1部リーグ昇格を果たしました。洋弓部は今年で創立50周年を迎えますが、節目となるこの年に1部リーグ昇格という素晴らしい結果を残すことができたことはまさしく快挙と言えるでしょう。アーチェリーは、弓で数十メートル離れた的の中心を狙って矢で射抜き得点を競うとてもシンプルなスポーツです。心技体いずれも軽んじることができず、とくにメンタル面が点数を大きく左右する競技でもあります。洋弓部の津島主将は「大学に練習場を持たず、スポーツ推薦もない東大が、上位校に引けを取らない点数をとり、関東トップテンの座に返り咲いたことには大きな意味があると思います」「一方で、全国のトップ大学との差はまだまだ大きく、来年に向けての課題は多く残っています。来年のリーグ戦ではさらに高い結果を出せるよう、反省を生かしていく所存です」とコメントしています。

CLOSE UP　Kavli IPMU 15 周年記念シンポジウムを開催（カブリ数物連携宇宙研究機構）

壇上に並んだ皆さん。かつて在籍していた3名の研究者からはビデオメッセージが寄せられました。横山広美副機構長が司会を務め、閉会挨拶は相原博昭理事・副学長が行いました

4月24日、カブリ数物連携宇宙研究機構(Kavli IPMU) は「世界トップレベル研究拠点プログラム WPI Kavli IPMUの15年の成果と展望――数学者・物理学者・天文学者・探究の旅路」と題した一般向けシンポジウムを実施しました。Kavli IPMUは、2007年に WPI拠点として採択され、数学・物理・天文分野の融合研究の成果を多数生み出してきました。本シンポジウムは、WPI 拠点としての15年間が終了し WPI アカデミーへ移行するにあたり、これまでの成果紹介と、恒久研究機構としての未来を歩むことの報告を目的に行われました。関係者のみが安田講堂に参集し、一般の方はオンライン配信を視聴する形で開催され、約1020名の参加がありました。

当日は、藤井輝夫総長、文部科学省の池田貴城研究振興局長、日本学術振興会の宇川彰WPI プログラムディレクターが挨拶し、大栗博司機構長が総合講演を行いました。高田昌広教授は「すばるで探るダーク成分」、伊藤由佳理教授は「特異点に秘められた謎」、マーク・ヴェイギンス教授は「もう待たない! 超新星ニュートリノ」と題してそれぞれ講演しました。

CLOSE UP　メタバース上でサークル新歓オリエンテーション（情報理工学系研究科）

並木沿いに各サークルの立て看板が

安田講堂前に集まったアバター参加者

バーチャルリアリティ教育研究センター（VRセンター：センター長 相澤清晴）ではデジタル環境下の仮想空間であるメタバースを本学の活動に利用する取り組みを進めています。今春、その一環として、2022年度の本学学生サークルの新入生歓迎（新歓）オリエンテーションをメタバース空間で実施するプロジェクトを実施しました。

今回、雨宮智浩准教授、伊藤研一郎特任助教をはじめとしたVRセンターのメンバーは、本学社会連携本部から提供を受けたバーチャル東大のデータにモデルの軽量化などの改良を実施した上で、VRセンターでホストするHubs Cloud内に東京大学をメタバース空間として再現し、正門から安田講堂へ向かう銀杏並木沿いに教養学部オリエンテーション委員会を通じて募った18の学生サークル団体の立て看板を設置しました。サークルの立て看板をクリックすると詳しい情報を見ることができます。相澤VRセンター長は「メタバースを使用した、より自由に交流ができる環境を構築することで、ポストコロナでも役立つような新しい学生活動の環境づくりにしていきたい。特に、関心を持つ学生が参加し、自ら手を加えて、育てていけるような仕組みを目指したい」と話しています。

※「学内広報」では広告掲載を受け付けています。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。→本部広報課（03・5841・2031）

七徳堂鬼瓦

謦咳に接する

「謦咳（けいがい）に接する」という言葉がある。元来は、尊敬する人の咳払いを身近に聞く、という意味らしいが、文化の違いを越えた学びにも人と人との密接な交わりが大きな役割を果たすのではないだろうか。

初めての長期の在外研究についた頃の緊張はいかばかりであったか。文部省から命ぜられてロンドンに赴いた漱石とは比べものにはならないが、当時の張り詰めた気持ちは今でも鮮明な記憶として残っている。異文化の中に身を置いて生活を始める中、研究の指導を頼った碩学の前で過ごす時間はとても貴重なものであった。活字を通しただけでは得ることができない多くを学んだように思う。

教える側からいえば、本学の先生方もそれぞれの専門分野に合った工夫を重ねながら学生の指導に尽力されてきたに違いない。文系の附置研究所に所属する自分の経験は限られているが、答案やレポートの採点、添削に始まり、研究倫理の徹底を含めた論文執筆の指導に至るまで、多大な労力を注いでこられたであろう。理系で始まったアカデミック・ライティングの教育も、近時では文系にも波及し、充実を増しつつあると聞く。国際的な研究活動の輪に加わるには、英語を使いこなすことが肝要だとする認識が深まってきた。

コロナ禍が始まった頃、大学院の運営業務に携わることがあった。遠い分野の博士論文の審査にも加わったが、日本語を母語としない院生が執筆した論文もその中に数えられた。日本語でのアカデミック・ライティングを指南される先生方のご苦労も推し量るしかないが、少なくない論文が高い水準に達し、日本語を媒体とする学術が展開する可能性にも改めて目を開かれる思いであった。

当分の間はソーシャル・ディスタンスを守り、他人の咳払いから身を遠ざける注意を怠ることはできないだろう。それだけになおさら強く、教員と学生が隔てなく接することができる日の再来を願わずにはいられない。

平島健司
（社会科学研究所）

東京大学広報室
no.1559　2022年6月24日

〒113-8654　東京都文京区本郷７丁目３番１号
東京大学本部広報課　TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp